

コミュニケーションにおける顔文字と比較して見る絵文字

経営情報学科 加藤ゼミ 4年

小嶺 翼 (22111142tk@tama.ac.jp)

1. 研究の目的

本研究は川上(2008)を参考に、絵文字のもつ意味について調査し、顔文字と比較を行う。

川上(2008)は、顔文字の関わる他の研究が、「それが付加される文章によって感情が特定される」ということを前提としているが、顔文字がどんな感情を表現しうるかということを知ることも重要であるため、顔文字自体があらわす感情、強調を調べることで顔文字のデータベースを作成することを目的として行われた研究である。

そして結果は、顔文字に対する、各感情評定値および強調度間の相関係数を算出し表にまとめられた。また、「喜びと楽しさ」、「焦りと驚き」はそれぞれ互いに高い相関を示し、後者は喜びや楽しさとは負の相関を示した。

自身の研究では、今日のコミュニケーションでは顔文字ではなく絵文字のほうが一般的のため、先行研究で使用された顔文字を基に絵文字やハンドサインの絵文字を選出し、今の私たちが使用する絵文字がどのような感情を表現しうるかを調査する。

2. 予備調査

2-1. 目的

本研究において先行研究で使用された顔文字と絵文字の類似性を保証して使えるようにするために予備調査を行う。また追加で調査を行うハンドサインの絵文字などは類似するものではなく、普段使用するかを聞くことで実際のコミュニケーションで使う絵文字の調査ができるようにする。

2-2. 方法

予備調査ではあらかじめこちらで先行研究に使用された顔文字と類似した用途で使われる絵文字を1つの顔文字に対し複数個用意し、それらをアンケートでどの絵文字が先行研究の顔文字に近いかを問うアンケートを作成する。その後前の段階では出なかった絵文字や、ハンドサインの絵文字でよく使用するものを挙げてもらい、その中で使用率の高かったものをいくつか本研究のために選出する。

Ex) 「(^_^)」この顔文字に最も近い絵文字を一つ選べ。 1. 😊 2. 😄 3. 😊

2-3. 結果の予測

Ex) 「(^_^)」この顔文字では😊この絵文字が最も類似する絵文字として選ばれるのではないか。

3. 本調査

3-1. 目的

本調査では絵文字の感情評価値を調査することで、絵文字がどのような感情を表現しうるかを数値化するとともに顔文字の数値と比較することで絵文字が今日のコミュニケーションにおいてどのような影響を与えているかを調査する。

3-2. 方法

先行研究で選出した絵文字について、6つ基本的な感情「喜び、悲しみ、怒り、楽しさ、焦り、驚き」の感情が表現され、強調されているか5件法で評定を求める。

Ex) 😊この絵文字が「喜び、悲しみ、怒り、楽しさ、焦り、驚き」をどの程度表されるか1(まったく表れていない)~5(とてもよく表れている)で評価し、その次にこの顔文字を使うことでどの程度その感情が強調されるか1(まったく強調されない)~5(とても強調される)のいずれかに答えてもらう。

3-3. 結果の予測

先行研究の顔文字に合わせて選出した絵文字には大きな差は見られず、同じような結果が出るのではないか。

しかし、絵文字と違い顔文字は表情の微妙な違いや色の違いを「文字や記号」の枠組みにとらわれず表現することができるため、より強調する力が強くなることや、あいまいな部分が増長されることが予想できる。

あいまいな絵文字やハンドサインは、それ単体では6つの感情の評価値にそれぞれ差がなくどの感情も絶妙に表現できる、あるいはできない結果になるが、動作を表すため協調の度合いは伸びるのではないか。

4. 引用文献

川上正浩.(2008).顔文字が表す感情と強調に関するデータベース 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要 7,67-82.